

## 新刊紹介

設 楽 靖 子

### 関口時正著『ポーランドと他者——文化・レトリック・地図』

みすず書房、2014年、368頁

「日本におけるポーランド文化研究の第一人者にして、詩を始めとする古今の文学作品、ショパンの書簡集などのすぐれた翻訳者による学術エッセイ集」と銘打たれた本書は、著者が1986年から2011年に発表した論文・エッセイの中から18点を自選したものである。著者は、1970年代なかばにクラクフ・ヤギェウォ大学に留学経験を持ち、東京外国語大学に国内初のポーランド語専攻が新設された1992年から同大学でポーランド語・文化を講じてきた教育者でもある。マス・メディア向けに書くことが少なかったゆえに名前を知る人は少ないかもしれないが、チェスワフ・ミウォシュ著『ポーランド文学史』（未知谷刊 2006）の監訳者としてその邦訳出版を可能にした人物である以上——この中には「ある一族の物語」としてアポロ・コジェニョフスキの文学史上の役割が紹介されている——、少なくとも日本においてコンラッドをポーランドの文化・文学・歴史の中で理解しようと試みるなら、この著者の業績には是非接しておきたい。

本書に収録された18点は、音楽（ショパンやシマノフスキ）、映画（キェシロフスキ）、舞台芸術（カントル）、ヨハネ・パウロ二世など多岐にわたるが、初出が入手しにくい論集・学会誌だったものが多く、この著者の業績が「ポーランド人の自画像、他画像ともいべきテキストの有用性」（iv；以下、本書での引用頁）をめぐる考察として1冊にまとめられたことの意義は大きい。ここでは、コンラッドに直接言及がある4点の論文・エッセイについて紹介するが、それらは古都クラクフを定点としてマリノフスキなりポーランド文学なりを論じたもので、コンラッドへの言及の度合いはそれぞれ異なっている。ポーランド文化研究の第一人者である人物が英文作家コンラッドの作品・生涯に言及するとき、それはどのような文脈の中で参照・引用されるのかという関心から、以下、執筆年順に読んでいく。

「ブロニスラフ・マリノフスキーの日記をめぐる」

(初出：『西スラブ学論集』創刊号 1986)

本書の自選 18 点の中では最も早い時期に書かれた論文で、マリノフスキーの没後 25 年の 1967 年に英訳・刊行された『日記』(*A Diary in the Strict Sense of the Term*; ニューギニアでのフィールドワークの時期、主にポーランド語で記された個人的ノート)を中心テキストとし、「日記」「無国籍」「コンラッド」「自然」というセクションで構成される。著者は、この『日記』の中にある *Heart of Darkness* からの直接引用をめぐる 1970 年代に人類学者たちのあいだで論議を呼んだ経緯などを辿ったうえで、マリノフスキーとコンラッド両者ともが「積極的な expatriate」として、「その国籍離脱状態の緊張を、最も良く表現と活動とに生かし得た人物」(211)であり、コンラッドについて「その表現と活動とに、マリノフスキー同様、浪漫主義と実証主義の不思議な融合を見る作家」と論じている。論文タイトルにはマリノフスキーの名前しかないが、後半はコンラッド論である。

この論文から 30 年近くを経た本書の「あとがき」には、「マリノフスキー、コンラッド、ヨハネ・パウロ二世、フェリクス・ヤシェンスキといった人物」について書いてきたことを振り返り、マリノフスキーとコンラッドの 2 人は、近現代ポーランドにおける「強烈なヨーロッパ中心主義」「強力な民族主義」という特徴が背景としてあるがゆえに、「物理的にヨーロッパとポーランドの磁力の圏外に出て、強い磁力を振り切ったからこそあれだけ遠くに行けたのだろう」(336)という解釈を示している。その箇所ので、「コンラッドについて独立したものは結局書いていない」(336)とわざわざ記されているが、それは、著者の中にはこの論文執筆の 1980 年代半ばからコンラッドへの関心が一貫してあったことを示す、と理解する。

なお、「コンラッドとマリノフスキー」の組み合わせが論じられるとき、必ず引用される必読文献は、James Clifford 著 *The Predicament of Culture* (1988; 邦訳『文化の窮状』)所収の“On Ethnographic Self-fashioning: Conrad and Malinowski” (邦訳「民族誌的自己成型」)である。この先駆的とされる論文でも中心テキストは『日記』であり、「ヨーロッパのコスモポリタンのアイデンティティへと運命づけられたポーランド人」(邦訳 128)としてコンラッドとマリノフスキーが論じられている。この Clifford 論文の刊行は 1988 年(人目につかない初出さえ 1985 年)であり、本書の論文はそれに先行するオリジナルの論考であったことは、特記に値するであろう。

## 「マリノフスキーの出発」

(初出：『比較文化雑誌』第3号 1988)

上記論文の続編として、「マリノフスキーがポーランド人であったということに、果たして何程か意味があるのか」(223)という問いから書き起こされ、「マリノフスキーの出発」すなわち出発地点クラクフとの縁を考察した論文である。結論部分において、「マリノフスキーは、ポーランド人であったということよりも、そのポーランドを出たことの方が、意味が大きい。クラクフを出発し、メラネシアに到着したことで、ねじれは一層大きく、強力なものとなった」(236)という記述があるが、この文中の「マリノフスキー」を「コンラッド」に、「メラネシア」を「ボルネオ」「コンゴ河」等に置き換えれば、そのままコンラッド論として成立する。

なお、著者は1910年にマリノフスキーがアニエラ・ザグルスカに宛てた手紙を引用し、「長じて英文学者となり、ポーランドにおける、最も優れたコンラッドの翻訳者となる」(228)この人物がマリノフスキーの英語の家庭教師だったという縁を紹介し(この事実はコンラッドの伝記研究では知られていないはずである)、「現在継続刊行中のコンラッド全書簡集が全て出て、マリノフスキーの書簡集でもまた出されれば、マリノフスキーのコンラッド意識という、少しづつながら我々にも判りかけてきている、案外大事な問題にも、このアニエラを通じて、もっと光があたるかもしれない」(228)と予告されている。コンラッドの全書簡集の刊行が完結した現在、その中に答はなかったと言えるが、これに関連して、Najderのコンラッド評伝改訂版(2007年)の中、初版(1983年)にはなかった関連記述があることに目を留めたい。それは、「1913年秋、マリノフスキーはMrs Retingerとともに初めてコンラッド宅を訪問した」(Najder, *Joseph Conrad: A Life*, 442)という一節である。Najderは、この加筆部分の出典として、『日記』のポーランド語原文(2002年に刊行)での注釈を挙げている。1914年のコンラッドのクラクフ訪問にはRetinger夫妻の勧めがあったことは既刊の伝記で明らかにされているが、Najderによる加筆からは、その里帰り旅行の動機として「マリノフスキーが語るクラクフ」があったのかもしれない、という推測が可能であろう。「コンラッドのマリノフスキー意識」は、現在、Daphna Erdinast-Vulcanらによる最新のコンラッド研究のテーマの一つであり、『日記』はその中心テキストである。

「クラクフ—月の都あるいはネクロポリア」

(初出：『三省堂ぶっくれっと』 (1990年9月号))

上記2点が論文であるのに対し、これは出版社の広報誌に載った一般読者向けのエッセイである。「東欧」という地域名称が「中欧」に変わり始めた1990年の秋、「中欧都市 <sup>そごろあるき</sup> 漫歩」という新リレー連載の第1回目として、クラクフを紹介したものである。コンラッド、マリノフスキー、スラニスワフ・レム、ヨハネ・パウロ二世らのゆかりの都市として紹介しながら、コンラッドの“Poland Revisited”の該当箇所を引用しつつ、この町は「王たちのネクロポリア nekropolia(共同墓地)」(264)の役割を持ち、「19世紀半ば以降、ひっきりなしに葬列の通過する町であった」(261)と紹介し、その中にコンラッドの父の葬列が位置づけられている。

コンラッド研究者が一人でクラクフを訪ねるとすれば、Najder および Krajka による記述とともに、この一篇をガイドブックとして持参したい。コンラッド研究者にとってのクラクフ案内として、これ以上有益な文章はない。

「ポーランド語文学を語り続ける<民族>」

(『岩波講座 文学 13 ネイションを超えて』岩波書店 2003)

『岩波講座 文学』は2002-4年に全13巻+別巻で刊行されたシリーズで、本論文はその第13巻『ネイションを超えて』所収。この巻のテーマ「ネイション形成の要としての言語」に沿って、19世紀以降のポーランド文学の流れが、(1)パトリオティズム・コスモポリティズム、(2)ボズィティヴィズム、(3)ロマンティズム・ネオロマンティズム、(4)メスィヤニズムという時系列で検討されている。コンラッドへ直接言及があるのは、冒頭(1)の導入部分において、「当時のポーランド文学界を代表する小説家エリザ・オジェシュコヴァ」(86)によるコンラッド批判(1899年)と、その数年後のイギリスの批評家ロバート・リンドによるコンラッド評(1908年)を対置する形においてである。前者はコンラッドを「祖国を出た裏切り者」として、後者は母語でなく英語を表現手段とする「コスモポリタン、家なき者」(87)として、評したものである。いずれもコンラッド研究では知られた引用であるが、この引用2点の併置から説き起こされる19世紀ポーランド文学史は、コンラッド研究者にも有用であろう。

ここでのわかりやすい「拾い物」を挙げると、英文学者はオジェシュコヴァの文章をNajderによる英訳で読んでいるが、本書ではポーランド語原文からの和訳で

読める点である。どちらでもよさそうなことではあるが、この和訳を読むと、Najderによる英訳を通してよりも批判のトーンが一層強烈であることが窺える。たとえば、Najder 英訳では省略されている部分に、「誰よりも高い値で買えるというだけで燕の巣、鱈の鱭にも事欠かぬというアングロサクソン人ら」という言い得て妙の表現がある。当然コンラッドはこの批判をポーランド語原文で読んでいたのであり、レトリックに富んだ母語による批判の一端をここで窺い知ることができる。

以上、本書の中、コンラッドへの直接言及がある4点に絞って紹介した。他には、「ポーランド語のヤン・コット」(初出:『英語青年』2002年4月)も、英文学研究者には興味の1篇であろう。さらに、もう1点、「ヴォウォディオフスキ殿とカミェニヴェツへ——シェンキェーヴィチの『トリロギア』再読」という、門外漢には全く意味不明のタイトルの論考を挙げておく。この論文は、著者が東京外国語大学とクラクフ・ポーランド文化センターと共同で企画した「国際移動セミナー」の報告書『ヨーロッパ東部境界地域の共有遺産研究I——ガリツィア』(東京外国語大学刊 2011)に含まれていた一篇であるが、その冒頭で、ポーランド語で「クレスイ」と呼ばれる「現在のポーランド領の外 . . . 『旧東方領土』とか『東部境界地域』あるいは『辺境地帯』などと訳さざるを得ない」(163)用語について、歴史的・文化史的意味が解説されている。コンラッドにとっての「ポーランド」はまさにこの「境界地域」に位置する以上、この概念は正確に理解しておきたい。

最後に、著者は、上記「マリノフスキーの出発」(1988年)の末尾において、「ポーランド人であれば、長く植民地主義に悩まされた者として、文化の平等、民族の自決を信条としやすいだろうという考えがあり得、コンラッドに関連しても、これは考えねばならない問題であるが、今のところ私にはこれに与する自信がない」(237)と述べているが、本書 2014年時点での追記として、「今なら、ポーランド人であれば文化の平等、民族の自決を信条としやすいだろうというような単純化、一般化は無意味だと言い切れる」(242)と記している。断片的な知識のみでそのような単純化に傾きがちな自分自身を振り返りつつ、その認識に近づく手立てを本書の中に探したい。

(しだら やすこ 武蔵大学非常勤講師)